

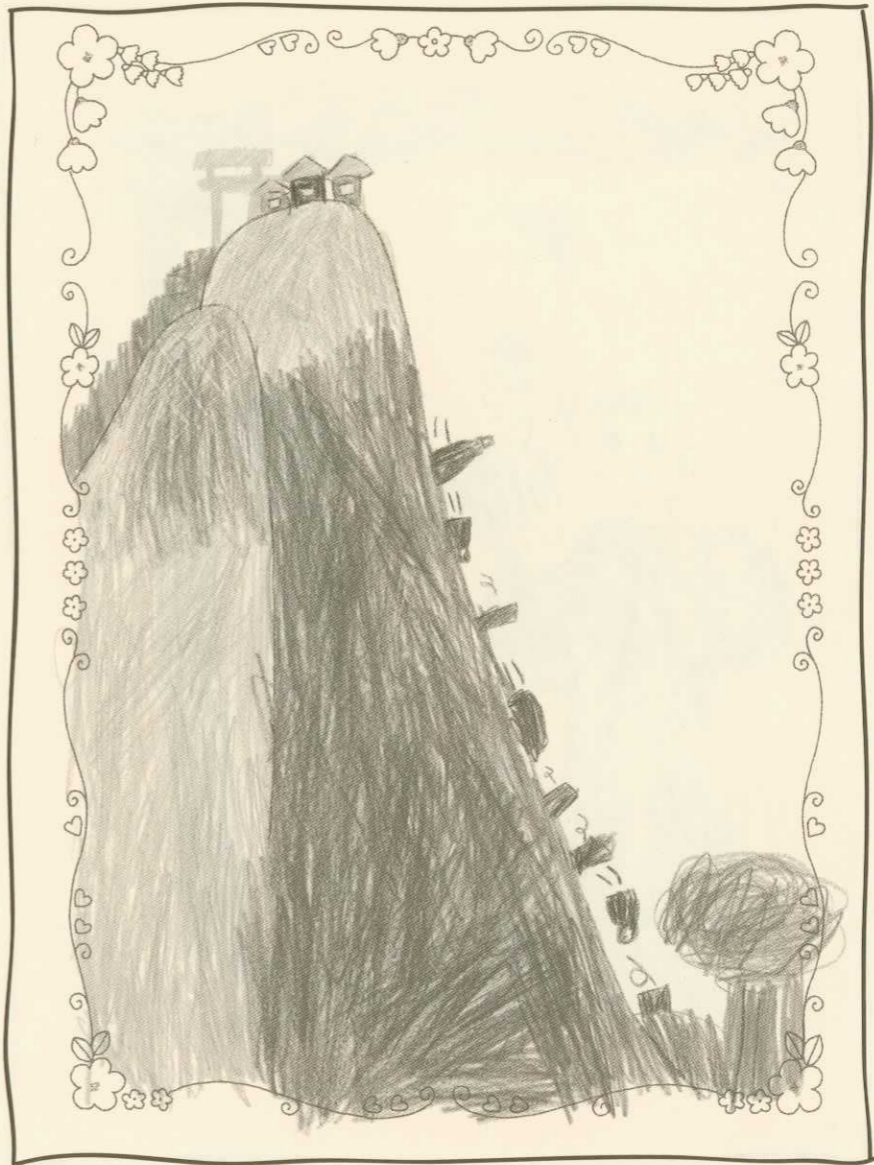
河和田の
昔日
ばなし



河和田の昔ばなし



清平さんと黒仏さま



鐘ヶ窪

「河和田の昔ばなし」合本版刊行にあたって

うるしの里づくり協議会会長 高野晃一

平成十一年、市と地域住民が協同して、河和田地区の活性化を目標として「うるしの里づくり協議会」が発足し、ものづくり、まちづくり、くらしづくりの三部会と各部会にいくつかのグループをもうけました。その一つに、くらしづくり部会に所属する「歴史・口碑グループ」があります。

河和田の歴史はとても古く、また民俗学からみても資料の多い地域で、今日まで何冊かの調査報告書が出版されていますが、それでもまだ埋もれていると思い、グループの皆さんは、長期にわたり実地調査、聞き取り調査、文献調査、意見交換等を行われ、その成果を基にこれらの資料を後世に伝えたいと願い、方言をふんだんに使って、子供に話しかけるような文体を用いて素晴らしい昔ばなしに仕上げてくださいました。

三回にわたり全戸配布しました本書を、このたび永久保存版として合本にしました。挿絵をかいてくれた河和田小学生はじめ、関係者のご苦勞に満腔の感謝を捧げます。

はじめに

鯖江市の東部の河和田地区は、鯛に似た地形で、入り口の別司から奥の上河内まで約六キロあり、昔ばなしの宝庫です。戸数一三三〇戸、人口五〇〇〇人余り、市の基幹産業である眼鏡や漆器を支えている地域です。

当地は、古くより山ぎわに十三の集落があり、水量豊かな河和田川の恵みをつけて、稲作に励んできました。山には杉を植えて、河和田杉の特産地になりました。また、片山を中心に、漆器の産地として、長い歴史をもっています。

戦国時代、朝倉氏が一乗谷に城下町を築いた百年間は、峠一つで連なる河和田は、防衛上の要地として、物資の供給地として発展しました。朝倉氏ゆかりの社寺も建立されました。ところが、天正元年（一五七三年）朝倉義景は、織田信長に攻められて自害し、一乗谷は焦土と化します。河和田も荒廃しましたが、在りし日の繁栄した様を、先人たちは延々と今に語り継いでくれました。

焦土から立ち上がった人々は、徐々に外の世界に目を向けはじめます。米作りの傍ら、壮年の男子は遠国まで漆かきや鎌商いに出かけました。寺中の砥石も掘りました。桑の木を植え、養蚕にも精を出し、蚕種を諸国へ売り出しました。女は糸を紡いで機を織り、漆かきに出た夫の半年間の留守を守り、農業を支えました。

他国に出向いた男たちは、進取の気概があり、新しい時代の風を持ち帰りました。鯖江市でいち早く眼鏡の職人になったのは、河和田の人々でした。

このような風土が、たくさんのはなしを語り伝えてきました。その中から、主なものを選び出してみました。